

学位論文の要旨

論文題目 唐宋敦煌民間信仰研究

広島大学大学院総合科学研究科
総合科学専攻
学生番号 D116280
氏名 林 生海

論文の要旨

民間信仰は自然崇拝と祖霊崇拝と民間宗教などが融合して、社会の中で次第に発展を遂げつつ伝承されたものである。

本論は、敦煌文献から読み説くことのできる民間信仰について様々な角度から検討を行うが、特に民間信仰の中で自然崇拝としての山岳信仰、死生観に関わる浄土信仰、宗教の融合の様相を見せる三夷教、そして漢語文化圏という環境における言霊信仰など、民間信仰を考える上で重要な幾つかの角度から考えていきたい。こうした内容から検討することにより、敦煌、そして唐五代における中国の民間信仰の特徴が示せると考えるからである。

またより具体的資料と方法としては、変文を代表とする敦煌俗文学文献を中心資料とし、敦煌における民間信仰の実態をまずは明らかにしつつ、唐宋時代の庶民生活を検討した。「変文」などの俗文学資料を使用するのは、敦煌文献の研究の中で最も早くから識者の関心を惹き、日本も欧米にもすぐれた研究蓄積が残され、かつ庶民の生活を知りうる最も纏まった資料だからである。変文の記載には、確かに多様な鬼神精霊やその歴史背景なども残されており、唐宋時代の庶民生活の中から民間信仰の様相を検討する為に、多くの貴重な資料を提供してくれている。

以上の考えと方法により、本稿は以下の四つの章に據り論を展開する。

第一章 金山国の背景に見られる敦煌の山岳信仰

アニミズムや自然崇拝は民間信仰の起源であり、そうした中で山岳信仰は自然崇拝の重要な要件であると考えられる。敦煌の民間信仰にもこうした山岳信仰が生き続けている。本章では、金山国の成立と山岳信仰の関係について検討し、唐末五代期における自然崇拝の状況について考えた。

金山国とは、唐帝国が滅びた後に沙州（敦煌）を中心として建立された地方政権である。その金山国では国名とつながる金山信仰が盛んであったとされる。ただ、金山が実は敦煌近くの山であり、金山信仰が山岳信仰の一種であったことについては、現在の学界はあまり関心を払われたことがない。ただ、最近荒見泰史氏のフィールド調査に據り敦煌三危山が鳴沙山とともに古来敦煌で信仰されてきたことや、敦煌の仏教信仰が山岳信仰から転化されたものであることが指摘され、敦煌に山岳信仰の土壌があることが明らかにされている。また日本の山岳信仰の特徴と「山岳宗教」と言う概

念が、同様に唐宋敦煌の山岳信仰の理解に役に立つと考え、本章では、これらを参考としながら、金山国の背景に見られる敦煌の山岳信仰について、敦煌の山岳信仰と仏教、政治体制の角度から検討を加えている。東西交流の要衝となる有名な仏教都市敦煌では、当地の民間信仰は複雑多様な面をもっていた。そこには山岳信仰と宗教信仰だけではなく、変遷する政治情勢とも関わりが深いことを明らかにした。

第二章 「帰去来」から「大聖変」へ—唐宋時代浄土信仰の一側面—

本章では、宋の洪邁『容齋隨筆』の「絵画帰去来者、皆作大聖変」（帰去来が絵に描かれるとすべて大聖変と言われる）の一句から、唐宋時代に流行した「帰去来」という言葉について検討した。陶淵明の『帰去来の辞』は人口に膾炙し、敦煌文献や同時代の伝世文献においても様々な「帰去来」と題する句が歌われる。その中でも西方浄土を宣揚する浄土讃として「帰去来」が盛んに歌われていたことは信仰の民間への滲透を考える上で興味深い。これより見るに、当時「帰去来」は、すでに阿弥陀信仰に溶け込んで、浄土信仰の用語になっていたことがわかるのである。先の「絵画帰去来者、皆作大聖変」は陶淵明の『帰去来の辞』と関わってはいるが、実は「帰去来」浄土讃流行の影響を受け、「大聖変」つまり阿弥陀浄土変相の俗称になったことを指しているのである。こうしたところから、仏教の流行が中国文化と互いに融合していく状況がわかるのである。

第三章 敦煌写本『降魔変文』より見た三夷教の要素

仏教は漢代に伝来して後、中国の儒家・道教等と融合しつつ、唐代には儒家と道教とともに三教という主流の地位を得るようになったが、この時期、他にも外来宗教の三夷教（祆教、景教、マニ教）が王朝から伝教の許可を獲得するようになり、各自で寺院を建立し、経典を翻訳して流行した。外来宗教が中華文明に何らかの影響を与えるのは当然のことであるが、仏教の影響はしばしば論じられても三夷教の影響について言及されることはあまりなく、仏教のように通俗文学に入り込んだかどうかはいまだによくわかっていない。

本章では『降魔変文』の表現や観念等は、儒・仏・道三教の思想では理解しがたく、むしろ三夷教に関わっているという考えを述べている。変文中の「外道」が僧侶と共に「和尚」を呼ばれているのは、おそらく三夷教が中国へ伝教する時、仏教の影響を受けたからである。敦煌には『降魔変文』の物語をもとにした大量の「劣度差門聖変」という壁画が残されるが、舍利仏は劣度差と幻術を用いて闘うのは、西域で流行した幻術の様子に近い。写本間との相違を比べてみれば、変文は儒家・仏教・道教三教を基にはしているが、外来宗教としての三夷教も参考になったとみるべきである。三夷教の特徴は、『降魔変相』という絵巻中の獅牛対戦図や外道の人物像等にも見られる。『降魔変文』は娯楽的な形で、当時の人々の好みに迎合したものであろう。つまり、『降魔変文』の中の様々な外来物の形は、多元文化をもっている敦煌で生まれたばかりでなく、敦煌民間信仰をも反映しているのである。

第四章 敦煌文献に見られる言霊信仰

言霊信仰とは、もと日本語の概念であり、日本文化中の一つ特色とされてきた。しかし、敦煌文献を據り見るに、古代中国にもこのような信仰があったと考えられる。本章では、日本の言霊という概念を借りて、敦煌文献に見られる言霊信仰について論説した。その内容は古代中国の民俗、儒家や宗教や政治などにも関わっている。当時

の敦煌における言霊信仰は理性的なものとそうでないものが混ざって見えるが、こうした信仰は民俗礼儀と信仰観念の組み合わせられた結果だと考えられる。

以上が本論文の主たる内容である。これらによって、国家祭祀ではない9・10世紀の民間信仰には、神祇地位の昇降と政治変化の関連、民間信仰は儒家と仏教と道教などとの融合、あるいは民間信仰の娯楽性と庶民生活など、政治、国家宗教、民衆の生活など多様な要素が反映されていたことを明らかにできるであろう。